

「和歌リテラシー」を育む中学校古典学習の可能性 — 「万葉・古今・新古今」教材における教師教育の視点から—

中村佳文*

How Learning Japanese Classics in Junior High School Cultivates "Waka Literacy". Examining Teacher Education from through "Manyo," "Kokin", and "Shin-Kokin".

Yoshifumi NAKAMURA

1、研究の目的と問題の所在

中学校における古典学習をどうすべきかという課題は、現行学習指導要領における「伝統的な言語文化と言語の特質に関する事項」が設定されて以来、小学校と高等学校の中間に位置する学習として、その連携の視点から模索すべきと稿者⁽¹⁾はかねてから考えてきている。小学校では「音読を中心とする親しむ学習」が中心であり、高等学校では「文法事項の学びを活かした自ら解釈できる力」を目標とするのが一般的な現場での実情であろう。それでは、中学校においてはどんな力を目標として古典学習を進めたらよいのだろうか。「音読」のみならず、「文法事項」には深入りせずの学習活動が求められる中で、曖昧な学習目標の設定を避け学習者主体の活動を目指すための「能力」の可視化が不可欠であるように思われる。

そこで本稿では「和歌リテラシー」という理念を掲げ、古典和歌教材において理解と表現の相互関連を意図し、様々な活動の後に学習者が和歌教材について対話的な発表に至る方向性を具体的に授業化してみようと試みている。「和歌リテラシー」という理念について定義をしておくならば、「伝統的言語文化総合運用能力」と換言でき、「和歌学習で身につく力」として「和歌解釈批評力」「伝統的言語文化理解力」「和歌創作力」「定型伝達力」「要点伝達力」「和語活用力」「対話力」「書写力」などが考えられる。その根本的な考え方として、元来より「和歌」そのものが多様なコミュニケーションツールであったことを前提としている。それゆえに「和歌教材」を学ぶ上では、現代の学習者自身も「伝える」という意志をもって、読解・解釈していく主体的な姿勢が不可欠となるはずである。

また今回は教師教育において「古典学習指導」の転換的改善を図りたいという視点から、本学教職大学院における院生の教育実習を、教材の授業化と実践検証の場として論を展開するこ

* 宮崎大学教育学部

となる。教職大学院が全国的に設置されるようになった現在、その場における実践中心の指導において、より高次元の多様な視点の融合が求められているのではないかと稿者は考えている。ともすれば「実践的な力」が標榜されることで授業技術に偏りがちな教職大学院における実習指導において、古典教材論や和歌文学研究の方向性を融合することこそが、真に高次元の授業実践を生み出すことを、具体的に検証してみたいと考えている。幸い稿者は、本年宮崎大学教育学部附属中学校で実施された教職大学院実習において1名の院生指導担当となった。その教材研究から授業化までの過程及び授業実践において徹した個別指導を施す機会を得た。高度な教職実践を展開するために必要な要素を、今一度学部卒ストレート院生に教師教育を施す視点から、再検討を加えてみようとする試みでもある。よって附属中学校で実践された院生の学習指導案及び学習者の表現成果を、ここに了承を得て検証対象として使用させていただくことになる。この試みの論文化そのものが、授業実践の高度化の深層に今一度再構築を求めることの契機になればと、教育協働開発センター紀要に掲載されることの意義を稿者自身に向けて再検討を差し向ける論考であるという立場をここに表明しておきたい。以上のような三点の目的と問題意識において、本論を展開していきたいと考えている。

2、古典音読活動の主体的な指導―「読み方」を考えさせる教師

文部科学省検定中学校教科書「国語3」(光村図書)単元5「いにしへの心と語らう」は、「古文・音読 音読を楽しもう 古今和歌集 仮名序」「古文 君待つと一万葉・古今・新古今」「古文 夏草一『おくのほそ道』から」「古文・解説 古典の心の中に」という四部構成となっている。本稿では、この前半部分を教材とした授業づくり及び授業実践とその成果について論じていくことになる。併せて本教材の教材研究から授業づくりと実践までを具体的に論ずるために、指導担当であった本学教職大学院院生の甲斐聖佳さんより了承を得て、学習指導案資料を提供していただいた。この学習指導案に至る指導過程を論ずることで、教師教育として重要な視点を見出すことができると考え、各項目の副題にそのテーマを添えたことをここに付言しておく。

古典学習に限らず国語の学習全般における音読活動において、「読み方」の指導は不可欠な要素である。基本的に初読の際の音読活動では、漢字を中心として「正しく」読むことができるかどうか大きな課題となり、誤りがあれば教師が指摘して矯正するのが常識的な指導であろう。だが小学校段階からこうした「指摘を受ける」ことが繰り返されて指導されて来ると、その本来的な意味合いが薄れて「音読」そのものを学習者が忌避する傾向が生じてしまう。さらに指導者としては内容理解を旨とする音読活動を施したくとも、「読み方の当否」のみに囚われる学習となり、この二点の弊害により学習活動が活性化しない実情が多々見られる。こうした事態を避けるために、教師が「範読」という活動を設定することも少なくないが、それでは上から「読み方」を押し付けるのみで、学習者が主体的に「読み方」の力を高めることにはならない。往々にして「読み方」は確定的なものゆえに、指導者が“押し付ける”傾向があるが、果たしてそれでいいのだろうか。

本稿で目指すべき「音読」活動は、学習者が自ら考えて問題意識をもって「読み方」を発見する主体的学習活動とする試案である。教材の文体・語彙・時代背景などのわかっている材料から勘案し、最適な読み方を主体的に見定めていく過程を重視した指導である。指導過程としては、まず教科書教材のイラスト部分に毛筆体で書かれた「古今和歌集仮名序」を、教師から

は何らかの視点を与えずに学習者は個別読みをする。まずは教材本文を教科書掲載通りの表記・改行でここに提示する。

やまとうたは 人の心を種として
よろづの言の葉とぞなれりける
世の中にある人 ことわざ繁きものなれば
心に思ふことを
見るもの聞くものにつけて 言ひ出せるなり
花に鳴く鶯 水にすむ蛙の声を聞けば
生きとし生けるもの
いづれか歌をよまざりける
力をも入れずして 天地を動かし
目に見えぬ鬼神をも あはれと思はせ
男女のなかをも和らげ
猛き武士の心をも 慰むるは歌なり

この時点では読み方の妥当性よりも、音読してみてのことばの響きや文体としての通り具合などを感覚的に各自が検証する意識が持てるように指導する。教材とする「古今和歌集仮名序」の教科書掲載部分に即して具体的に述べるならば、まず文中には「対」となる語を発見することができる。「見るもの聞くもの」と「花に鳴く鶯 水にすむ蛙」はそれぞれの中に「対」があると同時に、相互に「対」となる文体である。この文で特に注意するのは、「鶯」と「蛙」の読み方であろう。まず「鶯」に関しては、「ウグイス」ではほぼ問題なく読める中学生が多いように思われる。だが「蛙」に関しては現代語の「カエル」と読む者が大半であり、なかなか「かはづ（かわず）」とは読めないのが実情ではないだろうか。これは一種の「雅語」としての特徴であるが、教科書にもここには脚注をつけて「春の『鶯』に対して、秋の『蛙』を挙げている。」とそれが「春秋」との「対」であることを意識できるようにしている。古典学習では著名な芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」は小学生の段階でも知っているであろうから、こうした連想から古典和歌・俳句なりの語彙の読み方があることに気付かせる工夫が求められよう。またこの「仮名序」では、後半にある「天地」「鬼神」「男女」「武士」などの語をいかに読むかが焦点となる。多くの学習者は現代文における「漢語」としての読み方に慣れているために、「音読み」でこれらの語彙を読む場合が多いだろう。だが古典としての文体上、冒頭に「やまとうた」とあるように「漢語」であるならば「和歌」とするところを、「やまとことば（和語）」としての読み方を施していることが明確に指摘できる。こうしたことを提示することを契機として、前述した四つの語彙にしても「やまとことば」で読むとどうなるのか（「あめつち」「おのがみ」「をとこそんな（おとこおんな）」「もののお（ものう）」を、学習者が主体的に考える学習活動を設定したいものである。（*実際の教科書教材には、前掲の毛筆フォント本文の下段に、通常の教科書体フォント本文があり、そこにはすべて「ふりがな」が歴史的仮名遣いで施されている。よって前述したような学習を实践するためには、毛筆体本文を抜粋して印刷するなどの工夫が必要となる。）

次の段階として肝要なのが、「音読」を意味内容の把握といかに関連させるかである。必然

的と考えられるこの学習過程であるが、現場での授業実践を観察する機会ごとに、内容把握という目的を失い「音読のための音読」となってしまう実践をよく目にする。この点においては、小学校段階で暗誦を最終目標とする「音読のための音読」が展開されて来ることとも無関係ではあるまい。小学校段階でも特に高学年とあれば、単なる「音声化」のみならず、内容把握を意識して「音読」をする学習姿勢が持てるように指導すべきではあるまいか。その小学校段階から中学校での3年間を経た段階での古典学習であるゆえ、ここでは理想的な内容把握を意識した「音読」活動を実践すべく学習指導案の検討を繰り返した。その結果、得られた方策としては「視点」を提供して「音読」することである。

「視点」を提示するにあたり何にするかという点は、授業戦略の上で大きな鍵を握ることになるが、こうした際にも教師の教材研究から得られた成果を活用することが肝要である。前述した「読み方」の問題とも関連するが、指導者たる教師自身があらゆる教材に問題意識を高めて向き合うことが、何より「良い授業」への第一歩であることを、この学習指導案は具体的に物語っているといえよう。ここで取り上げた「古今和歌集仮名序」では、制作年代の時代背景として「ひらがなの創成期」であること、前代までの漢文中心の文体に対峙しようとして記されていること、日本で最初の歌論といってもよい教材であり文体そのものに修辭的な表現意図が濃厚であること、などを教材研究の段階で教師が十分に把握しておく必要がある。ここに示した時代背景そのものは中学校古典学習内容としては難解であり、そのものを指導内容にしようとするものではない。あくまで「音読」と内容理解を関連させるための授業展開を模索する上で、援用すべき知識と解釈の方向性であるということである。

この実践においては「視点」を、「読み方」「比喩」「具体例」の三点に定めた。既に確認した「読み方」への意識を高めた「音読」、その後「比喩」と「具体例」を意識した「音読」を学習していくことになる。（*後に記す学習指導案（1）の「指導過程5」）その後、それぞれを確認する過程になるが、この教材本文における「比喩」とは「人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」という部分である。また「具体例」とは、「花に鳴く鶯 水にすむ蛙」「天地」「鬼神」「男女」「武士」であり、「読み方」に問題意識を持つ際に活用した項目と重なっているわけである。このような「音読」と「内容把握」を関連させた活動を施した上で、教材全体の要点を学習者同士が交流しながらまとめる段階へと進む。本学習指導案では、本文の「要点」として「1、うたは心からできている。」「2、生きるものすべてがうたを詠む」「3、人間社会を和らげる力がある」という教師側の指標を持つように記されている。いわば「和歌の1抒情性 2本質 3効用」の三点を指導者として教師が押さえておくことになる。くり返すが、こうした「要点」に関しても指導者の深い教材研究から得られるものであり、その把握を中学生なりの次元に緩やかにして提供することで学習活動が円滑に運ばれることを指摘しておきたい。

【学習指導案1】

第3学年 国語科学習指導案

平成 年 月 日 () 校時

3年 級 (男子 名、女子 名)

指導者

㊦

1 単元名 いにしえの心と語らう

2 題材名 音読を楽しもう 古今和歌集 仮名序、君待つと一万葉・古今・新古今

3 目標

- 音読を通して、和歌の美しい調べを味わい、そこに表現された様々な見方や考え方に関心を持つことができる。 (関心・意欲・態度)
- 和歌の解釈の交流を通して、効果的な表現や語句の使い方の工夫に気づき、現代的な視点から和歌に対する自分の考えを表現することができる。 (読むこと)
- 和歌に表れた心情や情景を想像しながら読み、いにしえの心に親しむことができる。 (伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

4 指導観

- 本単元は、古典の心に親しみ理解を深める単元である。昔の人の生活や社会などの知識を通して想像して読み、古典の心を今に生かすことを単元学習のねらいとしている。具体的には、三大和歌集である『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』から15首の歌が取り上げられている。学習指導要領では、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の(1)ア、「伝統的な言語文化に関する事項」で、小学校からの系統性を踏まえる。中学校では、一層古典に親しませるとともに、我が国に長く伝わる言語文化について関心を広げたり深めたりすることを重視して指導する。また、第2学年において現代短歌に関する単元学習を行っている。そのため、本単元では第2学年の教科書に掲載されている現代短歌との比べ読み学習を行い、現代的な視点から古典和歌を捉え、今後、和歌に親しむための素地となるようにする。
- 本学級の生徒は、授業中の発言も積極性が見られ、素直で伸びやかである。しかし、発言する生徒は限られており、発言し自分の考えを伝えることに対して苦手意識を持っている生徒もいる。また、事前にとったアンケート調査によると、国語の中で最も苦手な分野は「古典」と回答していることから古典の学習に対する姿勢は消極的である。さらに、「国語の授業で身に付けられる力の中で、最も大切だと思う力は何ですか」という質問に対し、「話す力」と回答した生徒が約半数を占めるにも関わらず、「授業の中で最も苦手な活動は何ですか」という質問では、6割近くの生徒が「人に何かを説明すること」が苦手と回答している。その一方で、何か創作して表現することは好きである。前授業の詩の評論文を書く活動では、ほとんどの生徒が積極的に自分の意見を書く姿が見られた。そのため、本単元ではリーフレットを作り、それを使いながら他者に自分の考えを表現する活動を取り入れ、積極的に伝え合う力をつけさせたい。
- そこで本単元の指導にあたっては、まず、「古今和歌集 仮名序」を音読し、言葉の響きを味わいながら、和歌とはどういったものなのかを考え、和歌について関心を持つ。そして、教科書の解説や脚注を基に読解し、和歌に表れた作者の心情や情景を想像する。音読する際は、生徒が想像したことを反映させるために、句切れを意識する。その後、現代短歌との比べ読み学習を行い、生徒の生活体験を想起させ、現代的な視点から和歌に対する自分の考えを持つことができるようにする。最後には、生徒がそれぞれ選んだ和歌のリーフレットを作り、それを使いながら自分が和歌から読み取ったことについて簡単に紹介し合い、和歌に対する多様な考えを交流する。

展 開	<p>3 「古今和歌集 仮名序」を音読する。 ○ 「古今和歌集 仮名序」を各自で一読する。</p> <p>4 教師と共に適切な読み方を確認する。 ○ 一斉読みをし、言葉の響きに注意しながら適切な読み方を確認する。</p> <p>5 教科書を見ながら音読する。 ○ 一回目は読み方の復習をし、二回目は比喩と具体例に注目しながら音読する。</p> <p>6 比喩と具体例を確認する。</p>	<p>○ 内容を把握することで読みやすくなることを体感するために、読みの視点を与えず音読する場を設定する。</p> <p>○ 言葉の響きに気付くように、最初の自分の音読と比較しながら、教師と共に適切な読み方を確認するようにする。</p> <p>○ 音読を通して内容把握を図るために、三つの読みの視点を意識して音読するよう指示する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;"> <ul style="list-style-type: none"> ・読み方 ・比喩 ・具体例 </div> <p>○ 仮名序の要点を捉えやすくするために、</p>	<p>3</p> <p>7</p> <p>1</p> <p>2</p>
	<p>○ 教科書の比喩と具体例にサイドラインを引き、全体で共有する。</p> <p>7 三つの要点をまとめる。 ○ 「古今和歌集 仮名序」を読んで、教科書を参考に三つの要点についてペアで交流し、ワークシートに記入する。</p> <p>8 全体で共有する。 ○ 比喩、具体例を出し、三つの要点についてペアで出た意見を全体で共有する。</p>	<p>比喩と具体例を挙げるようにする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;"> <p>○比喩</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人の心を種として ・よろづの言の葉とぞなれりける <p>○具体例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・花に鳴く鶯 ・水にすむ蛙 ・天地 ・鬼神 ・男女 ・武士 </div> <p>○ ペアで交流しやすくするために、三つの要点から成り立っていることを伝える。</p> <p>○ 内容の共通理解を図るために、比喩、具体例を指摘した上で、三つの要点を全体で確かめる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;"> <p>○三つの要点</p> <ol style="list-style-type: none"> ① うたは心からできている ② 生きるものすべてがうたを詠む </div>	<p>10</p> <p>10</p>

	<p>9 繰り返し音読をする。 ○ 内容を把握した上で、言葉の響きを味わいながら、繰り返し音読する。</p> <p>10 ペアで音読する。 ○ ペアを組み交代で一回ずつ音読しあい、評価する。</p>	<p>③ 人間社会を和らげる力がある</p> <p>○ 音読に意味を反映させるために、繰り返し音読をする場を設定する。</p> <p>○ 言葉の響きを味わいながら音読することができたか振り返るために、評価する場を設定する。</p>	<p>4</p> <p>1</p>
<p>終末</p>	<p>11 次時の学習の見通しを立てる。 ○ 次時は、「万葉集」の和歌について読解していくことを知る。</p>	<p>○ 次時の学習の見通しを持ちやすいように、電子黒板に単元の流れを映し、次時の学習の位置を示す。</p>	<p>1</p>

(4) 本時の評価

評価規準	評価方法
<p>○ 「古今和歌集 仮名序」を音読し、古文の言葉の響きを味わうことができる。</p> <p>○ 「古今和歌集 仮名序」を読み、和歌とはどういふものかを知り、関心を持つことができる。</p>	<p>○ 学習活動 7、10 で使用したワークシートで評価する。</p> <p>○ 音読している際の様子やペアでの交流の際の様子も加味する。</p>

7 板書計画

<p>○ 三つの要点</p> <p>① うたは心からできている</p> <p>② 生きるものすべてがうたを詠む</p> <p>③ うたには人間社会を和らげる力がある</p>	<p>仮名序 本文</p>	<p>古今和歌集「仮名序」を音読し、言葉の響きを味わいながら和歌について理解を深めよう。</p>	<p>学習目標</p> <p>和歌リーフレットを作り、それを使いながら和歌から読み取ったことを紹介しよう。</p>	<p>単元の目標</p> <p>「いにしえの心と語らう」</p>
--	---------------	--	---	----------------------------------

3、学習者表現を機軸にした学習活動—理解と表現の演出をする教師

前に記した学習指導案の「指導計画（計7時間）」においては、項目2で詳述した「古今和歌集仮名序」の「音読」を中心に「読み方」を主体的に考える授業の後に3時間構成によって「(2)教科書の現代解説や脚注を使いながら、音読を生かした読解を通して和歌の具体的な心情や情景を想像する」という授業を設定している。中学校教科書の場合は、現代語訳も本文中に示され要点となる語には脚注も施されている。よって「現代語訳」を導くための授業を実践するのではなく、原文と現代語訳の間に存在するものに学習の焦点を向けるべきであろう。往々にして「古典学習」となると「現代語訳をするもの」「現代語訳をしないとわからない」といった先入観を持つ指導者が多く、それはたいてい自身の高等学校での「古典学習経験」が相対化されていないことに起因していると、稿者は日常の学生指導の際に痛感している。「古典学習」とは本来「現代語訳」を補助的に援用し、「原文を読む」ことこそが本道ではないだろうか。本稿で提示する和歌学習は、こうした問題意識の上にたち、「理解」（解釈）をするために「表現」（音読）するという立場で、学習指導案を構成している。

まず「音読」活動で和歌の韻律を享受しながら、「理解」する視点を示して解釈が進められるような設定を「音読を生かした読解」として『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』について実践する。「和歌を理解する視点」は和歌本質論にも関わる重要なことで様々な議論もあるが、基本的に「心情」「場面（情景）」「韻律」の三要素を据えておくことにする。この三要素の中で、「韻律」に関しては「音読」活動によって学習者が有効に体感できることを目指したい。できることならば、その「韻律」がその歌にしかない表現と決してかけ離れることなく結びついていることを味わうことが理想であろう。これも＜教室＞の「音読」活動の悪弊であるが、詩歌の「韻律」は韻律として、内容表現と別物として扱う学習が横行し過ぎている。特に和歌・短歌の場合は、この「韻律」が「心情」「情景」と三位一体で作品を成立させていることを忘れてはなるまい。よって「音読」活動を展開しつつ、作品の「心情」と「場面」を考えさせる学習を展開し、一通りの教材の読みを進めることになる。（*この展開における学習指導案は、紙幅の関係で掲載は割愛せざるを得なかった。）

前述のような方針で教科書掲載和歌を一通り学習することになるが、「現代語訳」主義な古典学習はここまでの段階を偏向した「精読」によって学習者に強いる場合が多く、むしろ「古典嫌い」を助長する傾向が否めない。「古典に親しむ」というテーマが、「伝統的な言語文化」学習の大きな柱であるならば、この点を改善することに努めねばならないと稿者は考えている。そこで今回の授業実践で設定したのが、「和歌リーフレットを作ろう」という単元のゴールである。7時間構成の終末3時間を利用して「和歌から読み取ったことのリーフレットを作る（2時間）」「和歌から読み取ったことについて、リーフレットを使いながら紹介し合う（1時間）」という「表現学習」の有効性を探ることにした。これもまた「理解」とは「表現」によって深められるものであり、また「表現」は「理解」に支えられるという言語系学習の基本理念を据えたものである。これまでの古典学習で決定的に欠落していたのは、この点ではないかと強く主張をしたいと考えている。

「和歌リーフレット」作成の基本となる授業展開は【学習指導案2】に示したが、その学習過程にも和歌・短歌においては常道となる事項を随所に配している。まずは一通り読んできた教科書掲載和歌から、「一首を選歌」すること。そして読解した基本知識に基づき、自分なり

の鑑賞・批評を持つこと。さらには近現代短歌との読み比べを行い、うたの表現史において和歌のあり方を見通す広い視野を確保することなどの観点である。いずれも授業研究のみの狭量な視野では獲得できないもので、和歌・短歌に対するより専門的な知識によって初めて導入されるものである。特に中学校国語学習が小学校段階と大きく違うのは、批評性を育むという点であり、とりわけ中3段階ともなればそこに焦点化した学習を望みたい。「選歌」から比較検討し自らの客観的に捉える思考を展開しうる活動型学習として、「和歌リーフレット」作成は大変有効であると考えられる。

また「近現代短歌との比べ読み」に関しては、中学校2年生段階の教材を活かすという意味でも、大変意義深いはずである。とりわけ和歌・短歌の場合は他ジャンルとは異なり、「やまとうた 1300年」の歴史の上で言葉を考えるという壮大な言語的探究であるとも言えよう。近現代歌人も意識・無意識を問わず、古典和歌に影響を受けている場合もあり、「五・七・五・七・七形式」の不可思議な詩的言語としての可能性を考えさせられることが多い。今回の実践で中学生が如何なる和歌と短歌を取り合わせるかということそのものに大きな興味があり、同時に学習者である中学生にとっても楽しい古典学習になったのではないかと思われる。以下、学習指導案とともに、実習校であった宮崎大学教育学部附属中学校の生徒作品（和歌リーフレット）を、可能なだけ掲載させていただく。

【学習指導案2】

6 本時の学習指導

(5) 目標

- 和歌から読み取ったことを伝えるための情報を集め、リーフレット作りに生かすことができる。
- 比べ読み学習や交流をすることで、和歌に表れた心情や情景を現代的な視点から考えることができる。

(6) 資料及び準備

- 第二学年教科書、資料集、ワークシート

(7) 学習指導過程

過程	学習内容及び活動	指導上の留意点	時間
導入	1 単元の最終目標を確認する。 ○ 最終的に和歌のリーフレットを作り、それを使って和歌から読み取ったことを紹介し合うことを確認する。	○ 単元のゴールイメージを持たせ、意欲的に活動に取り組めるように、リーフレットを作る目的を確認する。	2

	<p>2 和歌を音読する。</p> <p>○ 前時の学習を踏まえ、和歌に表れた情景や心情を想像し、お気に入りの一首を考えながら、教科書に掲載されている和歌の全首を音読する。</p> <p>3 本時の学習目標を把握する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>和歌から読み取ったことを伝えるための情報を集め、リーフレットを作ろう。</p> </div>	<p>○ 単元学習の流れを把握しやすいように、単元学習の流れを電子黒板に映す。</p> <p>○ これまでの学習内容を生かし、生徒が読み取った和歌の解釈を音読に反映させるため、句切れを意識して相手に伝えるように音読するよう指導する。</p> <p>○ 本時の学習課題を視覚的に確認できるように、黒板に学習目標を掲示する。</p>	<p>5</p> <p>1</p>
<p>展開</p>	<p>4 情報の集め方を知る。</p> <p>○ リーフレットのモデルやワークシートを見ながら、リーフレットを書くための情報の集め方を知る。</p> <p>5 本時の活動の流れを確認する。</p> <p>○ 本時は、ワークシートを活用して和歌から読み取ったことを伝えるための情報を集め、下書きをすることを伝える。</p>	<p>○ 活動の見通しを持ちやすいように、リーフレットのモデルを使いながら情報の集め方を説明する。</p> <p>○ 和歌を現代的視点で考えやすくするために、ワークシートを活用して、現代和歌との比べ読みを行い、情報を集めることを伝える。</p>	<p>10</p> <p>2</p>
	<p>6 気に入った和歌を一首選ぶ。</p> <p>○ 教科書に掲載されている和歌の中で、自分が一番心惹かれた和歌を一首選択する。</p> <p>7 比べ読み学習を行う。</p> <p>○ 教科書を基に、選んだ和歌と現代短歌の比べ読みをし、自分の経験と引き合わせて和歌から読み取ったことについて考え、気づいたことをワークシートに記入する。</p>	<p>○ 和歌を選んだ根拠を明確にするために、心を動かされた部分や表現など気に入ったところを具体的に示すよう指導する。</p> <p>○ 比べ読みしやすいように、第二学年で学習した現代短歌や教師が用意した現代短歌と読み比べることを伝える。</p> <p>○ 現代的な視点で和歌を考えられるよう、ワークシートを準備する。</p>	<p>1</p> <p>13</p>

	<p>8 リーフレットの下書きをする。</p> <p>○ 比べ読みを踏まえて、選んだ和歌から読み取ったことについてリーフレットに下書きをする。</p>	<p>○ 自分が和歌から読み取ったことを紹介しやすくするために、リーフレットに書く内容を工夫するよう指導する。</p>	12
<p>終末</p>	<p>9 次時の学習の見通しを立てる。</p> <p>○ 次時は、本時の活動を踏まえた上で、和歌から読み取ったことを紹介するためのリーフレットを完成させることを知る。</p>	<p>○ 次時の学習の見通しを立てやすいように、黒板に掲示している単元学習の流れを使いながら、次時の学習の流れの説明をする。</p>	1

(8) 本時の評価

評価規準	評価方法
<p>○ 和歌から読み取ったことを伝えるための情報を集め、リーフレット作りに生かすことができる。</p> <p>○ 比べ読み学習や交流をすることで、和歌に表れた心情や情景を現代的な視点から考えることができる。</p>	<p>○ 学習活動 5,7,8 で使用したワークシートで評価する。</p> <p>○ 音読をしている際の様子も加味する。</p>

7 板書計画

裏 表 【例】

和歌リーフレット

必要があればサブタイトルをつけてOK!

・制作年月日

・制作者(クラス、名前)

「選んだ和歌」

古謡ノ子情報

資料館等から集めた古謡ノ子情報

- ・作者について
- ・三大要素について
- ・大意

中身

和歌と現代短歌との比べ読みを通して、行いたいこと

学習目標

「いにしえの心と語らう」

和歌から読み取ったことを伝えるための情報を集め、リーフレットを作ろう。

【和歌リーフレット生徒作品例】

<p>父母が「頭かき撫で幸くあわれ 言ひし言葉せ忘れかぬつる。 防人歌</p>		<p>防人は奈良時代に大陸の侵入を防ぐために九州北部に派遣された兵士である。3年間の任期で主に東国が占めるので東国軍が多い。</p>	<p>母の住む国から降ってくる雪のような淋しさ 東京にいます。 儀まち</p>	<p>この和歌は、和歌の中に会話文を入れて防人の父母への思いを強く表現しているのが魅力である。父母が防人の頭を撫でながら、「無事でいるように」という言葉が忘れられない防人の心の中はいかばかりであろうか。おそろしもの凄く親に会いたいと思つて気持ちがいっぱいであろう。現代短歌の「母の住む国から降ってくる雪のような淋しさ東京にいます」という歌も同じように親を思っているというこころを書いた歌だが、現代短歌の方は比喻と母たりなので印象が少し優しいものに對して和歌は「忘れられない」という言葉を直截使ひより家族に對する強い印象を受ける。</p>
---	---	--	---	--

<p>見わたせば花も紅葉もなかりけり 浦の苫屋の秋の夕暮れ 藤原定家</p>		<p>「古今和歌集の特徴 作られた年代によって歌風は変化するが概して技巧を用いた繊細優雅な歌が多い。日本人の季節感や美意識の基準として後世にも大きな影響を与え及ぼした。</p>	<p>おほらかに風無き空に散りてある 木の葉をかめて窓とすかな若山牧水</p>	<p>この和歌の魅力は、花や紅葉など、和歌で大切な季節のキーワードをあえて無くす表現をすることで、哀愁や切がさくに満ちた秋の夕暮れの様子を引き立たせている所です。また、そこに「浦の苫屋」を入れることで、この和歌の作者が見た景色をリアルに想像させることができ、現代短歌の「おほらかに風無き空に散りてある木の葉なかめて窓とすかな」という歌も同じように「風」と「木」を表現を無くし、「散りてある木の葉」を引き立てています。また、「窓とすかな」という表現から、作者が何を思っているかわかり、その様子子をリアルに表現されています。</p>
--	---	--	---	--

ないと思ひます

<p>見ればせい、花も紅葉もなかりけり 舟の苦屋の 木の夕暮</p> <p>藤原定家</p>		<p>藤原定家は「新古今和歌集」の撰者の一人。本歌集の立ちを駆逐して華麗な歌風。歌論や史記で優れた業績を残した。「小倉百人一首」の撰まかいた。</p>	<p>校庭の地ならし用の ローラーは 座れば、世界中が夕焼け 恵すも 木村弓</p>	<p>この和歌の魅力は、最初の二句を詠むことではあるが、この後の二句で華やかさは変化するという点がある。見渡せば、花も紅葉も何もないが、海辺の苦屋の辺りの木の夕焼けが美しく映える様子により、感動した作者が思い浮かべられた。現代短歌の「校庭の地ならし用のローラー」座れば世界中が夕焼け」という歌は、夕焼けの迫りに圧倒される作者を想像させるられる。人は誰しも夕焼けを見れば、心を動かされ、歌を詠みたくなるのも無理はない。しかし、同じ夕焼けを詠んだ歌は、「世界中が」「舟の苦屋の」という表現の違いがある。私は、古典和歌の作者は、この辺りを見られたいというふうな限定感を出してあげたのだと思う。あえて「昔」に目を向けることで、本当の良みに気付かせたのだと思う。</p>
--	--	---	--	--

<p>道の辺に 清水流るる 柳かけ しばしとてこそ 立ちどまりつれ</p> <p>西行法師</p>		<p>西行法師（二ハニニハ）俗名は佐藤藤原もともとは鳥羽上皇に仕える武士であつたが、二十三歳で突然出家する。「新古今和歌集」には最初の九十四首が収録されている。</p>	<p>おおうかに 風無き空に 散りてゐる 木の葉ながめて 窓とぞすかな</p> <p>若山牧水</p>	<p>この和歌の魅力は、しばしとてこそ」の部分を読むことで作者の「こんなにも時間が過ぎていたのか」という敬慕心が想像できる。また、エアコンもせんぶう機もない遠い昔の夏の暑い日、人々は木かげでさまざまな休む方や季節の楽しみ方をしてきたのだと思う。</p> <p>現代短歌のおおうかに風無き空に散りてゐる木の葉ながめて窓とぞすかな」という歌も季節こそ違つても木の葉がはらばらと落ちる様子を窓を通してゆくり眺め、楽しんでるところが共通していると思う。今も昔も人々は季節の楽しみ方を歌にあらうしてることが分かる。</p>
---	--	--	---	--

4、「和歌リテラシー」を育む発表活動—背景たる知識で助言できる教師

最後に前掲の「和歌リーフレット」を利用して、学習者同士が「和歌の魅力」を語り合う対話型発表活動が設定され、本単元の学習は終了となる。古典学習が「読解（解釈）」のみに偏向しがちであることは、本稿の中でも指摘してきたが、最終的に学んだ対象である和歌を自らの言葉で「書く」「話す」活動によってこそ、「古典に親しむ」ことや「伝統的な言語文化」を理解することが可能となるのではないだろうか。青木太朗⁽²⁾は「和歌一首の解釈に重きを置く授業だけでなく、多くの和歌を集めた中でさまざまな分析や読み取り方をした上でその解釈をより深めること。そのことが古典文学の魅力を感じる道筋を開くことになる。」と「和歌教材の可能性」を述べている。

授業を構成するためには方法論に終始することなく、教材をどれほど深く研究できたか、そして教師自らがその教材の魅力に気付けるか、という観点が不可欠であろう。とりわけ本稿で示した「和歌リテラシー」の考え方は、和歌研究及び短歌研究と国語科教育研究を融合して新たな時代の古典学習を築くことを目標としている。和歌・短歌そのものが内に籠る表現作品ではなく、コミュニケーションツールとしてこそ「やまとうた」の歴史が綿々と持続・発展してきた事実をまずは教師が感嘆の眼差しをもって向き合えるか否か、そこに「よい授業」への成否のすべてがあると言っても過言ではない。

注・文献

(1) 小論「小中高等学校の連携を見据えた〈伝統的な言語文化〉に関する指導方法の検討—「音読・朗読」の学習活動を基軸にして—」『宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要』第22号
2014年3月

(2) 青木太朗「和歌教材の可能性をめぐる—『古今和歌集』歌から」『文学部紀要』31-1（文教大学文学部 2017年9月）